

2022. 1. 2. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書5章25～34節
『安心して生きる』

2004年度、ナイト・シャマラン監督の「ヴィレッジ」という映画があります。舞台は深い森の中に佇む小さな村です。実はこの村は殺人事件で愛する者たちを無情にも殺された被害者の家族たちが密かに切り開いた村でした。決して同じ悲劇が繰り返されぬよう村人は強い絆で結ばれているのです。しかし、主人公の目の不自由な少女は婚約者の大げがのために掟を破って町に薬を取りに行きます。村の存在が知られてしまうと反対する長老達に、主人公の父親がこう話します。

「愛する者の瞳の中に絶望に満ちた光を見たくないために私たちははこの村を作った。しかし、そんな私たちが同じことを、つまり絶望を愛する者に対して強要してしまうなら、この村は解体すべきだ。

彼女は愛に導かれている。愛こそ至高のものである。私たちはそれを得るためにだけ生命が与えられていることを知るべきである。」と・・・。

先週学びました5章1節以下で伝道とは自らの差別性との向き合いであることをマルコは明らかにし、ゲラサの人もイエス一行もそれぞれが生活の場へと帰されて行きます。そして、21節で向こう岸、つまりユダヤ社会に帰ったイエス一行はその後、福音を差別の課題と切り離すことなく語り出しに行くのです。

さて、本日の物語は21～24節、35～43節の「ヤイロの娘」の物語の間に挟まれた「イエスの服に触れる女」の物語です。このような形はサンドウィッチ構造と呼ばれ、緊迫した時間の迫りと登場人物の懸命さをより一層浮き彫りに致します。

ここに12年間も出血の止まらない女性が登場します。長患いという言葉がありますが、長期にわたる病は経験した者でなければその本当の痛みは計りかねます。病の辛さとは、それが長期になるにつれ親身に連れ添ってくれる者が櫛の歯が欠けるように一人またひとりと去ってゆくという悲しい現実が横た

わっているのかと思うのです。

この女性も 26 節にあるようになんとか治癒するために努力をしました。しかし、それらは「何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。」と記されます。それは愛してくれる者が日々疎くなり、同時に愛する対象も無くしてゆくということなのです。いわば、愛の関係性からの疎外、これが人を生きたまま死に至らしめます……。

イエスは 30 節で「自分の内から力が出ていったことに気づいて」、この女性と向き合われます。マルコはおそらく原初的な奇跡物語の文言をそのまま用いることによってイエスとこの女性の出会いを劇的に描きます。常に人格的關係を最優先されるイエスを描くマルコの手法です。

対照的に弟子たちの反応が描かれます。こんな大勢いるのに誰が服に触れたかなんて分かりっこないというのです。この答えが正解です。しかし、合理的で即物的な答えは正解であっても暖かさはないのです。福音とはこんな差別的な即応をしてしまう体質を厳しく問うことなのです。

イエスはこの女性と出会ったとき、彼女の生きてきた孤独な悲しみを時の慌ただしさに逃げ込むことなく、そのまま受け入れられました。そして、「もうその病気にかからず、元気に暮らして下さい」と、彼女をもう一度、人を愛することの出来る人生へと送り出されるのです。